

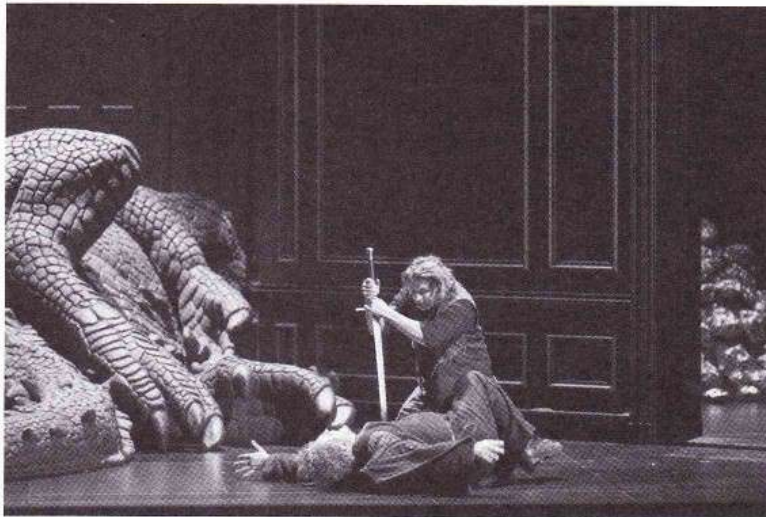
ノセダが「最優秀指揮者」に選ばれる

国際的な「オペラ・アワード2023」が発表され、2月27日、ドルトムント劇場で授賞式が行われた。「オペラ・アワード2023」の20部門中、「最優秀指揮者」に、チューリヒ歌劇場の音楽監督ジャン・ドレア・ノセダが選ばれた。受賞の主な理由は2022年4月から同歌劇場において始まったワーグナー「ニーベルングの指環」だという。

授賞式からまもない3月5日、チューリヒ歌劇場で《指環》の《ジークフリート》が初日を迎えたが、それを証明するような白熱した演奏だった。ノセダ率いるフィルハーモニア・チューリヒ（チューリヒ歌劇場のオーケストラ）は、回を重ねるごとにワーグナーのこの大作を徐々に掌握している。今回は冒頭の弦のはじける音からスリリングで、ワクワクさせた。主役二人は初役だが堂に入っている。題名役のクラウス・フロリアン・フォークトはいつも子供のような無垢な声で歌い始め、その柔らかさを保ちながらヴォリュームを出していくのだが、ジークフリートは低めの音域で、リリックに歌うことも少ないので、エンジンがかかるのに時間がかかった。しかし終幕まで純な声で歌いきって成功を収めた。ブリュンヒルデのカミッラ・ニールンドも自然な歌唱で、ワーグナーの重苦しさは皆無だった。アルブレヒトのクリストファー・バービスも母

国語でないのに美しいドイツ語を聴かせたが、ノセダの指揮では、全般的に歌詞が大切にされている。

さすらい人役のトマス・コニエチュニーも毎回言葉をしっかりと扱い、すばらしい歌唱を聴かせていたが、今宵の第1幕では光れなかった。《指環》4部作の演出を担当しているアンドレアス・ホモキ総裁も、



「オペラ・アワード2023」の授賞式直後に上演されたチューリヒ歌劇場の《ジークフリート》から ©Monika Rittershaus

回を重ねることによってなっている。

再演としては、チェチーリア・バルトリ主演のロッシニ《チエネントラ》が人気を博している。1994年のチエーザレ・リエヴィ新演出で、プレミエ・キャストだったバルトリは約30年歌い続けていることになる。50歳代後半でシンデレラ役になれてしまうのがオペラの凄さだ。毎回、

王子様は若くなっていくのだが、今回の南アフリカ人レヴィ・セクガペインはみずみずしい声で、最初の二重唱からすばらしく、アリアのあとには大拍手に包まれた。ダンディーニ役のニコラ・アライモとドン・マニフィコ役のアレッサンドロ・コルベッリのイタリア人コンビは絶妙なタイミングの芝居を見せた。観客は熱狂し、若い世代も目立ち、ロック・コンサートのように奇声をあげていたのがオペラには珍しい光景だった。

そのほか、アズミック・グリゴリアンのリサイタルも、いまをときめくリトアニアのソプラノの底力を見せるのに十分だった。前半チャイコフスキー、後半ラフマニノフで、ロシア歌曲のみだったのが、少し残念だった。

3月16日には来シーズン演目の記者会見も行われたが、以前当歌劇場で踊っていたというキャシー・マーストンが新しいバレエダイレクターに就任し、勢いをアピールした。ホモキは2025年に総裁を退くこともあり、ノセダの存在感が増していたのも印象的だった。

細川俊夫の日本色に染まる トーンハレ

3月1〜3日はケント・ナガノ指揮。J・S・バッハ《フーガの技法》のあと、細川俊夫のオペラ《海、静かな海》の「間奏曲」が演奏された。このオペラのテーマである東日本大震災と原発事故から12年目の3月に聴けたことに意義を感じた。休憩後はブルックナー「交響曲第9番」を、ナガノは丹精に裁いた。第1楽章から高いテンションかつ正確。そんなオーケストラがユニゾンでうねると独特の美を醸し出す。最

後は超弱音に戻り、上品に曲を終えた。

3月26日には細川も臨席して室内楽のマチネが行われ、《黒田節》、そして《2つの日本民謡、ゲジネ》では本場に桜が舞い散るさまが目につくようだった。《ピエール・ブーレーズのための俳句》、《線VI》、「フルートとピアノのための《リート》」もふくめ、小ホールを埋める聴衆を日本へ誘った。終演後は日本人聴衆とのふれあいの場も設けられた。

ほかにも当楽団にクリストフ・エッシエン・バッハが久しぶりに登場し、ブラームス《ハイドンの主題による変奏曲》、同「交響曲第1番」、そしてゴッティエ・カブソンのソロでエルガー「チェロ協奏曲」を聴かせたり（3月8日所見）、バーヴォ・ヤルヴィ音楽監督指揮、ファジル・サイの独奏でモーツァルト「ピアノ協奏曲第23番」とR・シュトラウス《アルプス交響曲》を演奏したり（3月23日所見）と充実していた。

ムジークコレギウム・ ヴィンタートウアー

ここ数年、より意欲的な活動を見せるムジークコレギウム・ヴィンタートウアーが、年頭のバーバラ・ハンニガンに続いて、ジョイス・デイドナートを招き、チューリヒ芸術大学と共催でマスタークラスを開いたが、筆者が聴いたなかで最高の指導で、聴講したすべての人に感嘆を与えた。3時間にわたり5人を親身に支援する姿は、ボジティヴ・オーラの塊だ。素材さえ持っていれば、彼女の指導で誰でも大歌手になれるのでは、と思わせる。そして翌日は《冬の旅》のリサイタルもこなした。バーデン・バーデンで聴いたときよりも成熟しており、シューベルトの心に胸を振るわせられた。